



TITLE:

# 記憶と社会 ―ーモーリス・アルヴァックスの記憶の社会学をめぐって( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

金, 瑛

---

CITATION:

金, 瑛. 記憶と社会 ―ーモーリス・アルヴァックスの記憶の社会学をめぐって. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20468>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	金 瑛
論文題目	記憶と社会—モーリス・アルヴァックスの記憶の社会学をめぐって		
(論文内容の要旨)			
<p>モーリス・アルヴァックスの記憶に関する研究については、彼の「構築主義」的側面が過度に強調されてきた経緯がある。これに対し本学位申請論文は、彼の記憶論3部作のうち『記憶の社会的枠組み』前半部の理論的考察と、晩年の『集合的記憶』の時間論・空間論を主たる対象とし、これらを内在的に読み解くことで彼の「実在主義」的側面を新たに浮き彫りにするとともに、それが記憶論の系譜においてだけでなく、現代思想一般の動向においてもつ画期的意義をも明らかにしようとしている。</p> <p>序論では、社会学における記憶の位置づけを整理すると同時に、そこにおけるアルヴァックスの特異性とその人物像を紹介している。またアルヴァックス記憶論の日本とフランスにおける受容のされ方の相違を説いたうえで、本論文が一時的な記憶論ブームを超えて、アルヴァックスと記憶に関わる継続的な学説史・理論研究を目指すものであることを確認している。</p> <p>第1章では、『記憶の社会的枠組み』第1章と第2章の理論的考察を通じ、アルヴァックスがベルクソンの夢と記憶に関する議論に対して、記憶の枠組みとして「言語活動（langage）」を重視していた点を確認している。その際、大森荘蔵と野家啓一という構築主義的な哲学の検討を通じてその可能性と限界を明らかにし、さらに社会学の最先端における浅野智彦と北田暁大による構築主義批判の議論も射程に収めて、構築主義の困難を実在論からではなく、言語論の側から乗り越える可能性を理論的に探ろうとしている。</p> <p>第2章では、『記憶の社会的枠組み』第3章と第4章の理論的考察を通じて、「過去は現在の観点から再構成される」というアルヴァックスのテーゼを再検討し、構築主義的な記憶論にアルヴァックスを回収できないことを確認している。その際、ルイス・コーザーによる「現在主義」的解釈を批判的に検討するとともに、「枠組み（cadre）」が記憶を制限するだけでなく、記憶を可能にし作り直しもするというように、両者の複雑な関係を探っている。アルヴァックスのいう「再構成」とは特権的現在から一方的になされるものではなく、過去と現在とを往還する認識であり、表層的枠組みと深層的枠組みの交差・せめぎあいにおける記憶の累積的側面こそが重要だというのである。</p> <p>第3章からは、晩年の『集合的記憶』に視点を移し、『記憶の社会的枠組み』において主に作用として捉えられていた記憶が、時間的実在として捉えられるようになったその変化に注目している。記憶における想起の側面だけでなく、獲得・保持の側面への注目から、ポール・リクルの議論を参考に、記憶が人格の連続性と連動しながら時間的連続性を持つことに記憶の本質を見出し、さらに松島恵介の議論を援用して、変化と持続という二重の時間性を統合する時間的存在が記憶であるという解釈を示している。そのうえで、集団の記憶を自己の記憶に接続しうる「集合的記憶」が、単一の視点から書かれた「歴史」といかに異なるかを、アルヴァックスの議論に即しながら強調している。</p> <p>第4章では、ベルクソンの「持続」概念に影響を受けながら、アルヴァックスが集合的記憶と時間の関係を独自に展開したことを探っている。ベルクソンは「持続」において対象が外部の客体としてではなく、内部に属するものと認識されると説いていたが、言語や空間といった契機や社会的な時間の区分を、「持続」とは対立するものとして退</p>			

けた。これに対し本章は、ベルクソンの「持続」の意義を認めつつも、社会的な時間の次元が記憶において持つ意味を、アルヴァックスだけでなくジャン・ドレー、野家啓一の時間論に即して探っている。すなわち、アルヴァックスの検討においては、特定の関心に基づいて特定の集合的時間が共有されることが集合的記憶につながることを確認し、ドレーの検討においては、社会的記憶が「レシ (récit)」という言語活動と論理的に階層化された社会的時間によって可能になっていることを確認し、野家の検討においては、過去を「物語る」ことによって非線形的に垂直に積み重なる時間構造として過去の実在性が浮かび上がることを確認するというように、構築主義的な記憶論の限界を言語論の側から超える可能性を模索している。

第5章では、集合的記憶の成立において空間が持つ意義を、アルヴァックスが物質性と象徴性の二重の観点から空間を論じている点に即して確認している。その際彼が「空間」ではなく「場 (milieu)」という概念を用いたことに注目し、これをフランス語の milieu が持つニュアンスやユクスキュルの「環世界」と関連させるだけでなく、またデュルケームの社会形態学における「場」の概念にも連動するものとして、「場」が独自に担う道德性と象徴性の次元を探っている。その際、デュルケームの道德論・象徴論、アルヴァックスの宗教論、モースの贈与論などの検討を行なう中で、法・宗教と経済の違いを検討し、さらに資本主義や消費文化と記憶の関係を追究している。また古代の記憶術をも射程に収めて「場」を成立させる「場所」のあり方を原理的に明らかにする必要性を説いている。

最後に終章では、これまでの議論をまとめるとともに、さらにアルヴァックス研究を拡充すること、道德・象徴論を精神分析の知見と接合すること、「場所のアポリア」についてさらに考察を深めることなど、今後の研究を展望している。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、おもにモーリス・アルヴァックスの記憶論の精緻な読解を通じて、彼を構築主義者と位置付ける通説を疑い、記憶の实在論的側面を見出すとともに、精神分析や哲学・歴史学・経済学などの記憶に関する他の主要業績も広く渉猟することで、記憶の本質に理論的に迫ろうとする意欲的な試みである。

1980年代から1990年代前半ごろを起点に、グローバル化によって国民国家をはじめとする既存の集団的カテゴリーが揺らぎ始め、同時にホロコーストや歴史教科書など、戦争の記憶に関わる問題があらたに問われるにともない、「記憶ブーム」とも呼べる現象がみられた。その際、哲学における「言語論的転回」とも共鳴して、記憶を過去のオリジナルな事件の再現ではなく、現在からの社会的・集合的な「再構成」と見なす「現在主義」的見方が優勢となった。アルヴァックスの『集合的記憶』はこのような文脈の中で再評価されたわけである。しかし本論文は、いままであまり注目されてこなかった、それ以前の『記憶の社会的枠組み』前半部と晩年の『集合的記憶』の理論的考察を精緻に読み解き、アルヴァックスがベルクソンを批判的に継承することによって、記憶が言語活動から離脱する側面ではなく言語活動という社会的枠組みによって可能になる側面を指摘すると同時に、その枠組みから零れ落ちる残余として、「实在としての記憶」の次元にも気づいていたことを重く見る。

通説を疑うこうした読解はそれ自体迫力のあるものだが、本論文の魅力は、そもそも「記憶とは何か」という理論的な問題意識に一貫して裏付けられていることに加え、記憶をめぐる幅広い文献渉猟はいうに及ばず、デュルケーム、モース、ジンメルなどの他の社会学、ソシュールとヴィトゲンシュタインの言語学、大森荘蔵と野家啓一の哲学、またラカンとジジエックの精神分析、ピエール・ノラの歴史学など、他分野の議論との関連性を的確に見定めていくその射程の広さにある。それらの検討を通じ、集団の記憶を自己の記憶に接続しうる「集合的記憶」が、言語活動と階層化された社会的時間に基づいて、単一の「歴史」とも異なる实在性をもつという主張はきわめて説得的である。

以下、特筆すべき論点と、同時にそれにかかわる問題点を各々指摘する。

第一に、「時間の实在性」を、歴史的に直進する物理的時間と同一視するのではなく、折り重なる「垂直的な時間」、「非連続の連続」あるいは変化と持続の二側面を持った「複層化した過去」として捉えるという視点が本論文のかなめであり、申請者はまたそのことから、単なる言語とも区別された物語行為を、知的に再構成された「プロットとしての記憶」を形成するものとして重視する。

この实在的時間は「集合的記憶の複数性」に対応した、「集合的時間の多数性」とされているのだが、しかしこれは集合的記憶とも区別された实在と言い切れるのかという疑問は残る。

第二に、本論文は、資本主義と記憶（忘却）の関連についても論じており、その際、経済原理の台頭によって、過去から現在への連続性よりも、未来における利益が基準になり、その限りで資本主義は記憶に抗する社会システム、過去を忘却する社会システムであるとの指摘はたしかに説得力がある。これは資本主義が貨幣よりは、むしろ信用に立脚した社会システムであることと関係しているであろう。

しかし、資本主義もまた恐慌において貨幣という实在に反撃される。その限りで、資本主義は忘却と親和的だが、貨幣はむしろ記憶と親和的といえないか。少なくとも貨幣には著者のいう物質性と象徴性の二重性を見出していくことが必要だと思われる。

第三に、枠組みと類似の作用に注目していることが目を引く。つまり、集合的記憶の成立にとって、他集団のエピソード記憶をあたかも自己のエピソード記憶であるかのように想起することが不可欠であり、そこに「類似したわれわれ」という意識、「感性の共有」という契機が必要だとの指摘は重要である。さらに、ベルクソンが枠組みを固定したものと捉え、そこから逃れる細部を重視したのに対して、アルヴァックスは、出来事とともに枠組みも想起の対象となるだけでなく、出来事と枠組みが相互浸透して、枠組み自体が出来事に触発されて変動し、作り直されるものと認識していたとの指摘は、枠組みの構造変動を探る際にたいへん意義深い。

しかし、「感性の共有」の及ぶ範囲はどこまでなのか、つまり、まったくの部外者でも集合的記憶を共有する可能性はあるのか、という疑問は残る。

以上のような疑問点を指摘できるとはいえ、このことは本論文の問題提起の独創性と、行き届いた文献渉猟、読解の正確さ・緻密さを損ねるものではない。今後のさらなる拡充が期待されるところである。

以上の通り、本学位申請論文の研究成果はすでに複数の学術雑誌に掲載され一定の評価を獲得しており、その独創性と学術的価値は高く評価される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降